

都市緑地の利用に関する研究（Ⅱ）

— 自然観察センターの役割 —

九州大学農学部 古野 浩子・薛 孝夫・汰木 達郎

1. はじめに

昭和59年から環境庁によって進められてきた自然観察の森整備事業は、都市及び都市周辺における身近な自然を回復保全し、人々、とりわけ子供たちと自然とのふれあいを推進しようというものである。

福岡市においても、昭和63年に油山市民の森の一部23haを自然観察の森として整備し、自然観察センターを設けて資料展示や観察会の指導などを行っている。

この報告は、油山市民の森の利用者および自然観察センター利用者を対象に行ったアンケート調査を自然観察に重点をおいて分析し、センターが市民の森の中で果たしている役割を探ろうとしたものである。

2. 調査方法

市民の森の利用者を対象としたアンケートは前報¹⁾の月別調査の4～6月分509件の調査票を用いた。センター利用者へのアンケート調査は、夏休み期間中20日間にわたって行った。調査票を子供を含むセンター利用者グループに配布し、帰宅後に記入して郵送してもらい、68の回答（回収率37%）を得た。

3. 結果および考察

(1) 自然観察を目的とする来訪者のセンター利用

油山市民の森の利用者全体に対するセンターの利用率は39.3%であり、センター利用者の半数以上が2回以上入ったいわゆるリピーターである。

油山を利用する人のうち29%が、利用目的として自然観察を選んでいる。ここで自然観察を目的とした利用者と目的としていない利用者とに分けて比較すると、前者の62%がセンターを利用しているのに対し、後者では30%しかセンターに入っていない。利用目的を自然観察とし、その活動目的を〈自然について知るため〉とする人に限ってみればセンター利用者の割合が80%と高くなるが、自然観察の目的を〈自然とふれあうため〉とする人では、58%と低くなる（図-1a）。

またセンターを拠点として行われる自然観察会等の行事への参加経験を聞いたところ、観察を目的としている人の40%が参加経験ありと答えたのに対して、観察を目的としていない人では11%に留まっている。自然観察の目的を〈自然について知るため〉とする人では、観察会などの行事への参加経験者の割合が61%と高くなるのに対し、自然観察の目的を〈自然とふれあうため〉とする人では39%と低くなる（図-1b）。

センター利用に注目して、センターに入らなかった人、始めて入った人、リピーターの3者に分けて市民の森の利用目的および活動目的を比較した（図-2）。リピーターでは〈自然観察〉をしに来た人の割合が大きくなり、また、その活動目的として〈自然について知るため〉を挙げる人の割合も大きくなっている。〈自然とふれあうため〉を活動目的とする人の割合は全体に高く、センター利用の傾向とは関連がない。

利用目的を〈自然観察〉とする人から、センターを利用していない人とリピーターとを取り出してみると、〈自然について知るため〉を活動目的とする人の割合が、前者で16%、後者で45%となっている。〈自然とふれあうため〉を活動目的とする人の割合は、前者では91%、後者では80%と逆転している。〈自然観察〉を利用目的としながら、センターを利用していない人は、〈散歩・散策〉や〈ハイキング〉を併せて利用目的として選ぶ率がリピーターと比べて高い（図-3）。

これらの結果から、①自然観察を利用目的とする来訪者と自然観察センターの存在とは強い関わりを持っていること、②特に〈自然について知るため〉に自然観察をしようとする人ではセンター利用率やセンターを中心に行われる行事への参加率が高いこと、③〈自然とふれあうため〉に自然観察をするという人はセンターを特によく利用するという訳ではなく、散歩や散策でその目的を満足していること、などが指摘できる。

(2) 利用目的や利用形態とセンター利用の効果

利用目的によって、センター利用後の印象も異なっている。自然観察を目的とする人の50%近くが、〈と

でも面白かった〈知識が得られそうだ〉を選んでいる。そのうち〈自然について知るため〉を活動目的としている人では、60%が〈知識が得られそうだ〉を選んでいる。一方、観察を目的としない人では、40%の人が〈まあまあだと思う〉を選んでいる(図-4)。

また、センター内で職員の解説を受けた人の割合は、観察を目的とする人の71%に対し、観察を目的としない人では46%と少ない。これらは、自然観察を目的とする来訪者が、積極的にセンター内の展示の意図をくみ取り、自然解説を受けることによってセンターの利用効果を自ら高めていることを示唆している。

夏休みのセンター利用者の感想を、個人で利用したグループと団体利用やセンター主催行事参加者グループの2つに分けて比較してみると、油山の利用後の感想として〈知識が得られてよかった〉を選んだ人の割合が、個人利用者が31%であるのに対して、団体利用者および行事参加者では53%と高くなっている。後者の利用形態では必ずセンター職員による自然解説を受けることになっており、これが利用者知的な満足感を与える効果をもたらしたと思われる。

これらから、自然に親しみ知識を得ようというはっきりとした目的を持って訪れる利用者が、適切なプログラムに従ったガイドを受けた場合に、その効果が最もよく発揮されていることがわかる。

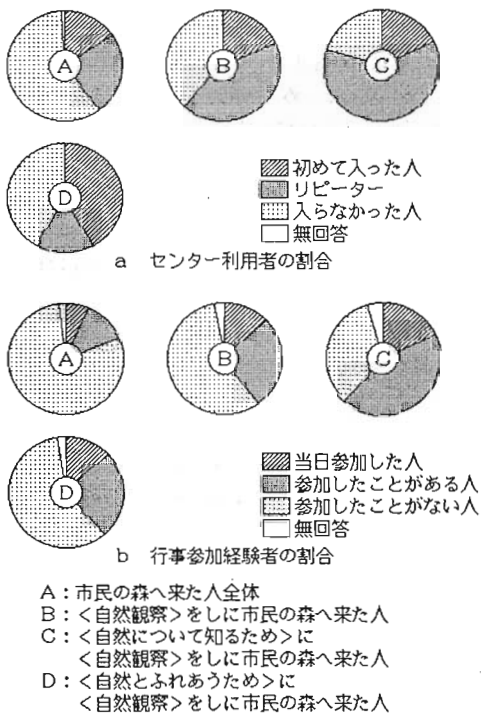


図-1 センター利用者および行事参加経験者の割合

4. おわりに

自然観察という行動および自然への知的興味の2つと自然観察センターの利用との間には強い関わりが見られることが明らかになった。また、自然観察の森や自然観察センターの設置の意義の一つ〈自然とふれあう〉ことについての市民の感覚は、センターのような施設を利用することより、自然の中での散策などの方が強く意識されていると推察された。今後は、種々の利用者層にふさわしい自然体験と自然教育の機会を与えられるような運用についても検討していきたい。

引用文献

- (1) 古野浩子ほか：日林九支研論，46，25～26，1993

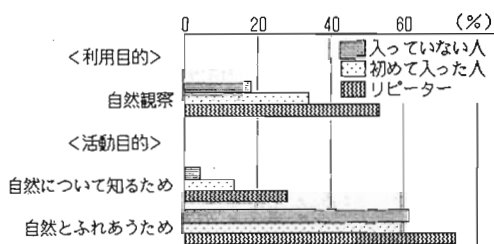


図-2 センター利用と利用・活動目的

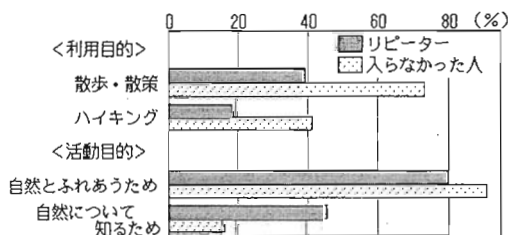


図-3 自然観察と重複して選ばれた他目的

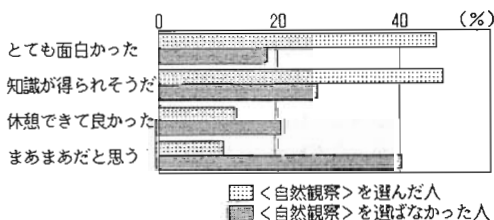


図-4 センター利用後の感想